

女性雑誌『ナチ女性展望』に掲載された連載小説と その作家たち

桑 原 ヒサ子

はじめに

「第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるジェンダー・民族表象の国際比較」をテーマとする共同研究⁽¹⁾の中で、ドイツを担当する私は当時発行部数第1位（1939年時点で140万部）⁽²⁾であった官製女性雑誌『ナチ女性展望』（初年度1号、1932年7月1日～第13年度4号、1944/45年）⁽³⁾を分析対象としている。これまでも表紙に見るジェンダー、母親像、女性の戦時活動、国防軍女性補助員、全国女性指導者ゲルトルート・ショルツクリンクと彼女が統率するナチ女性団とドイツ女性事業団の活動、ファッションと料理のページから再構成する第二次世界大戦下の暮らしといったテーマで分析結果をまとめてきた。本稿では、『ナチ女性展望』に掲載された連載小説について考察する。

『ナチ女性展望』は、さまざまなナチ女性組織を統合して発足したナチ女性団の機関誌として創刊されたが、1933年10月に強制的同質化によりナチ化を受け入れた非ナチ女性組織からドイツ女性事業団が誕生すると、非ナチ女性をナチ体制に組み込む有効な手段の一つになる。こうして1934年1月1日号（第2年度13号）から「党公認の唯一の女性雑誌」と位置づけられた。

『ナチ女性展望』創刊当時、雑誌市場には234誌の女性・家庭・モード雑誌が出回っていた。⁽⁴⁾そうした商業雑誌と官製雑誌『ナチ女性展望』の構成が決定的に異なる点は、毎号巻頭に戦没将兵慰霊の日、復活祭、ヒトラーの誕生日、母の日、ドイツ大美術展、党大会、収穫祭、クリスマスなどナチスの記念日や暦上の祝祭のほか、時事問題やイデオロギー的な特集記事が掲載されたことである。こうした特集記事とナチ女性団・ドイツ女性事業団の活動報告を除けば、詩、連載小説、本や映画の紹介、ファッションや料理、ガーデニングや家事のアイデアなどの実用ページと広告で構成されている点は、他の女性雑誌と変わらなかった。『ナチ女性展望』を編集・発行した全国女性指導部の「新聞・雑誌・プロパガンダ」部門は、他の雑誌との競合に打ち勝ち女性読者を獲得するために、第2年度5号（1933年9月1日）から2号に1回、誌上で紹介される流行服の型紙

を付録に付けるようになった。商業雑誌では型紙は有料だった。この号からファッションや実用の頁を増やしており、両者の頁を合わせると、雑誌全体の15～20%を占める。⁽⁵⁾ この戦略の結果、1年も経たないうちに、女性雑誌市場において新参の『ナチ女性展望』は、発行部数で首位に躍り出たのである。

一方、連載小説は縦2段組で、各号の構成により1～4頁の紙幅を割り、平均して雑誌全体の10%弱を占めている。経済対策が功を奏して、失業者数が減少し豊かさの兆しが見え始めた1937年1月から7月にかけては、付録に新しい連載小説が併載され、読者は2本の連載小説を楽しむことができた。間もなく『ナチ女性展望』は1939年に自己最多販売部数に達する。ここから、購読者は官製雑誌の特集記事よりも商業女性雑誌より安価な『ナチ女性展望』のファッション・料理・実用の頁や連載小説を目当てにしており、全国女性指導部も、そうした読者の好みを把握した上で、女性読者を拡大したことが窺える。

それでは、『ナチ女性展望』にはどのような作家のどんな内容の連載小説が掲載されたのだろうか。ここではまず、ナチ指導部の文化・著作政策を概観し、次に掲載作品の傾向をまとめ、今日ではほとんど忘れ去られた作者たちについて紹介してみたい。

1. ナチ指導部の文学政策と女性雑誌

1933年2月27日の国会議事堂放火事件後、異なる思想の持ち主に対するナチ党のテロが始まり、3月5日の国会選挙の結果、ヒトラー新政権の地位が確固たるものになると、マン一家、ベルトルト・ブレヒト、アンナ・ゼーガス、アルノルト・ツヴァイクといった作家たちが続々と亡命した。5月10日に実行された焚書は、国家による検閲と文化支配の到来を予告する出来事となった。国内34の大学町で起こった「非ドイツの精神への抵抗」としての焚書に使われたブラックリストには、カール・マルクス、ハインリヒ・マン、エーリヒ・ケストナー、ジークムント・フロイト、エーリヒ・マリーア・レマルク、クルト・トゥホルスキー、ハインリヒ・ハイネ、それにカール・フォン・オッシエツキーといった重要人物の名前が連なっていた。

しかしドイツ学生連盟によって全国的に組織されたこの事件は、国家の許可を得てはいなかった。確かにベルリンのオペラ座広場で燃えさかる火を前に集まった4万人の群衆に向かってゲッベルスは演説し、ラジオで放送もされたが、それは焚書に関わる支配権を取り戻そうとする宣伝省大臣

の意図があったからだった。⁽⁶⁾ 学生たちの使ったブラックリストも不完全なもので、国家が禁書リストを発表し、事前検閲を行うようになるのは、もう少し先のことだった。

ナチス党内には20年代からアルフレート・ローゼンベルクとヨーゼフ・ゲッベルス、それにナチ党の他の主要人物との間で文学政策分野で激しい権力争いが続いた。組織的カオスと、個々の部署の役割分担の不備により、国民社会主義の統一的文学政策は作り出されず、そうした状況を親衛隊保安部は、次の様に報告している。

広範囲に及ぶ文化組織の拡大にもかかわらず、統一的文化計画が欠けている。全国教育省、内務相、宣伝省、ローゼンベルクの役所、州や地方の文化行政、党の文化局、個々の部署が統合した全国文化院、歓喜力行団の組織、大学講師連盟、学生連盟、関係の職業連盟(…)は、個々に国民社会主義の文化政策や文化活動を行おうと努めているが、これらの多様な実行力を、根本的なパートにおいて相互に調整し、将来を見通して計画を立案する一体となった文化政策へまとめることにこれまで成功しているとは言い難い。⁽⁷⁾

たとえば、ドイツ労働戦線(DAF)全国指導者ローベルト・ライは、歓喜力行団のプログラムとして大規模な朗読会を組織したし、数百万人の読者を抱える数千の大小さまざまな企業図書館も所管した。さらには、ヴィースバーデン国民図書シリーズなど書籍出版にも積極的で、C.F.マイヤーのような古典作家から宣伝パンフレットまで手がけ、DAFに巨額の収入をもたらした。1942年、20以上の出版社、7つの印刷所、2つのブッククラブ、製紙工場を1つDAFは所有していたのである。⁽⁸⁾

しかし、ナチス期の文学・出版界の方向性を決めたのは、対立関係にあったローゼンベルクとゲッベルスであった。

ローゼンベルクは、1927年のニュルンベルク党大会で設立された「ドイツ文化のための闘争同盟」を指導することになり、ヴァイマル時代の文学制度を攻撃し、国民社会主義を信奉する文学と民族主義的作家を支援した。この組織から後に「全国ドイツ書籍振興局・ナチ党の精神と世界観に関わる包括的研修および教育のための総統代理による書籍育成中央局」が誕生する。その主な活動は作家の朗読会や書籍展覧会の開催、「ユダヤ人作家一覧」や雑誌『書誌学』の発刊で、第二次世界大戦開戦後は「ドイツ国防軍のためのナチ党の書籍収集」という大々的な活動を展開した。『書誌学』には書籍に「推薦」から「推薦不可」までの評価を付けた「鑑定通

知」が定期的に公表された。ところが書籍出版禁止については、ゲッベルスの書籍に関する部署に権限が委ねられていた。

ゲッベルスもすでに1929年からナチ党の全国宣伝指導部でプロパガンダ、映画、ラジオや国民教育に携わっていた。彼は全国国民啓蒙および宣伝省の大臣に就任するや、文学活動を操作する組織を手に入れる。1933年9月22日の法律により全国文化院が国民啓蒙・宣伝省の下部組織として設立されると、ゲッベルスはこの会長となった。文化院は映画、音楽、ラジオ、演劇、新聞、造形芸術そして著述という7つの領域から構成されていた。映画、音楽、ラジオはナチスのプロパガンダにおいて重要な部門であったことは周知の事実であるが、著述分野もまた、ナチ・イデオロギーを大衆に浸透させる極めて効果のあるメディアであった。図1に見られるように、1934年の書籍出版数の国際比較において、絶対数においてドイツは第一位だったのである。⁽⁹⁾ 全国文化院の設立は、作家たちの運命を左右した。この7部門の一つであった全国著述院に加入できなければ、作家として活動することは許されなかったからである。全国著述院の初代会長は保守的な民族主義者ハンス・フリードリヒ・ブルクだったが、ゲッベルスからその生ぬるさが批判され、1935年には筋金入りの国民社会主義者ハンス・ヨーストに交代させられた。最後までこのポストに留まったヨーストは、ルール占領時の1923年に軍事鉄道爆破に関わったとして



図1 最下列に各国の人口、その上に国名、書籍の棒グラフ上に1934年に出版された書籍のタイトル数が記載されている。1位ドイツが21,023、2位イギリスが15,628、3位フランスが15,309、6位アメリカは8,198となっている。

フランス軍事裁判所の判決で死刑に処せられたアルベルト・レオ・シュラゲーターを英雄として描いた戯曲『シュラゲーター』(1933年)で一躍有名となった。同じく1933年の2つの物語を収めた『永遠の母・出会い』は、ナチ時代20万部を売るベストセラーであった。

1936年からゲッベルスは禁書についても管轄することになる。全国著述院による「好まれぬ書籍リスト」に掲載されると、当該書籍は没収された。リストは「禁書会議」で作成された。宣伝省が主導するその会議の出席者は、全国著述院、党の専門委員会、国家秘密警察、保安課報中央局、全国教育省の代表であった。そのほか、全国著述院は、書籍小売業者や図書館に対する推薦リストを作成し、書籍展・書籍会議、執筆者の朗読会や文学賞の授与を企画し、過去の価値ある本や新刊から選んだ「今月の6冊」といったキャンペーンを展開した。戦時中は、書籍検閲業務の全ては全国著述院の管轄であった。

ゲッベルスにとって、問題の作家を排除する最も有効な手段が禁書であり、逆に特に推奨したい作家には、自ら主導して設けた文学賞を与え、戦時中には莫大な発行部数が見込まれる国防軍向けの特価版書籍に指定するなどの手段を使って優遇した。

それでも、先述したように、ゲッベルスの省庁が支配権を独占していたわけではなかった。文学出版政策の整合性の欠如は、1941年までに発表された禁書リストが断片的であって、ある作家の一定の作品がリストに挙げられ、他の作品はなぜ問題とされなかったのか不明であったし⁽¹⁰⁾、外国人作家についても、敵国であるフランスのアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの『人間の土地』が1940年に出版され販売部数135,000部を記録したことにも明らかだった。1937年に出版されたマーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』も、アメリカの参戦で禁書になるまでに366,000部を売るベストセラーとなっている。⁽¹¹⁾また、開戦までは包括的検閲が存在しなかったため、1939年までは、ユダヤ人の出版社にも出版活動が許されていた。「アーリア化」すなわち、強制的売却を拒絶したユダヤ系出版者たちは、1935年末には全国著述院から排除されたため営業禁止となったが、1931年に操業したショッケン出版社が非常な利益を上げたように、ユダヤ人読者のためのユダヤ人の書籍を販売することは許されていた。⁽¹²⁾しかし、それも1938年11月9日から10日にかけて起こったポグロムまでのことだった。

第二次世界大戦後、児童文学作家として名をなしたイルゼ・クレーベルガー(1921年ポツダム生)は、12、3歳頃に読んだ本を振り返って

る。エーリヒ・ケストナーやカール・マイのほか、イギリス人のラドヤード・キップリングの児童文学を読んだこと、政治的な本では、唯一カール・アロイス・シェンツィンガーの『ヒトラー少年クヴェックス』が印象に残っていたという。こうした本は両親が買い与えたのだが、最後までヒトラー支持者だった父親の本棚には、1933年以降禁書となったルートヴィヒ・レンの『戦争』やエーリヒ・マリア・レマルクの『西部戦線異状なし』が『我が闘争』と並んでいたことを記憶している。⁽¹³⁾ 禁書リストの書籍は、書店や図書館からは没収されたが、個人の本棚からはすっかり消えたわけではなかったのである。

それではナチ政権期に活躍した作家はだれだったのだろうか。一つは「党を支持する詩人」と呼ばれる若手作家グループで、ハインリヒ・アーナカー、クルト・エガース、リヒャルト・オイリンガー、エーバーハルト・ヴォルフガング・メラー、バルドゥール・フォン・シーラハ、ゲーアハルト・シューマンらがいた。彼らの詩や小説、戯曲や放送劇は、総統を頂点とするナチ運動や民族共同体、それに英雄死を謳い上げた。彼らは文学を通じて新しい国家建設に力を尽くしたいと考えていたのである。これらの作品は文学的価値は低かったが、新しい目標を目指す肯定的な気分が若い読者を感激させた。『ナチ女性展望』もヒトラーを賛美するフォン・シーラハやアーナカーの詩を掲載している。

しかし、第三帝国の文学を体現していたのは彼らではなく、エルヴィン・グイド・コルベンハイヤー、ハンス・グリム、フリードリヒ・グリーゼ、ハンス・フリードリヒ・ブルンク、ルードルフ・ゲオルク・ピンディング、アグネス・ミーゲルらであった。彼らは愛国的保守派で民族主義的傾向があり、ヴァイマル共和国時代に、彼らのうち何人かはそれ以前にすでに作家として成功を収めていた。ナチスの権力掌握によりドイツ文学の代表者たちが亡命したために、彼らは突然脚光を浴びることになったのである。彼らの大半は躊躇することなくナチス独裁を賛美したが、ナチ党の党员であっても、彼らのほぼすべてが「党を支持する詩人」というレッテルを貼られることを嫌った。

第三帝国の文学の代表者となった彼らもまた他の作家同様、国家によって管理された文化活動の一部でしかなく、党の政治方針から逸脱すれば、たとえ社会的尊敬を集めていたとしても制裁を免れなかった。ブルンクは全国著述院会長職を失い、ハンス・グリムは文学賞を一切贈られることはなかったし、ピンディングの葬儀に文化官僚の公式の代表者が出席することはなかった。それでも、彼らは当時の文学の規範であり続け、50万部を

売るベストセラー作家であった。『ナチ女性展望』もミーゲル、ピンディング、ブルンク、グリムの詩や記事を頻繁に掲載している。

最後に、女性雑誌と検閲について触れておきたい。権力掌握後、ジャーナリズムに対しても同様の統制の嵐が吹き荒れるが、女性雑誌に関する限り、ナチ当局は編集方針に介入しなかった。というのも女性雑誌では20年代から30年代の基調が続いており、家庭や職場での女性解放論がテーマに取り上げられることはなかった。したがって政治上の問題にもならなかったからである。しかし、開戦と同時に宣伝省に「雑誌ニュース部」とそれを補完する「週刊ニュース部」が創設されると、女性雑誌の編集内容も細部にわたって統制を受けることになった。主要点は、①銃後の女性を安心させる前線報告、②男手を失った職場への動員を促す義務履行の啓蒙宣伝、そして、③父や夫が出征した時の心構え、物不足を乗り切る知恵・儉約方法、衣類のリフォームなどだった。

したがって、『ナチ女性展望』を出版した全国女性指導部の「新聞・雑誌・プロバガンダ」部門は、開戦までは男性同僚から影響を受けずに雑誌編集を行えたのであり、開戦後も使命感から、とりわけ②と③に関する模範の記事を送り続けた。⁽¹⁴⁾ 報道・実用記事のように直接的ではないにせよ、読者に対する女性編集者の啓蒙姿勢は連載小説にも見て取ることができる。

2. 『ナチ女性展望』に掲載された連載小説

(1) 掲載作品一覧

著者（性別）	タイトル	主人公の性別	時代背景	掲載期間、連載回数
マリー・ディースル (女)	『鏡の中の顔』 (書き下ろし)	女	現代	初年度1号（1932年7月1日号）～12号（1932年12月15日号）、12回
バルバラ・カタリーナ・フォン・ブロンザルト(女)	『女主人』 深刻な時代の農村小説	女	第一次世界大戦	初年度13号（1933年1月1日号）～第2年度23号（1934年5月第2号）、35回
テオフィーレ・フォン・ポディスコ(女)	『闇から抜け出して』	女	現代(ナチス闘争期)	第2年度24号（1934年6月第1号）～第3年度16号（1935年1月第2号）、18回
オットー・マリア・ボレップ(男、オーストリア)	『新しい家』	女	現代(第一次世界大戦後)	第3年度17号（1935年2月第1号）～第4年度2号（同年7月第2号）、12回
マルガレーテ・クルルバオム＝ジーベルト(女)	『人間の転機』	女	第一次世界大戦	第4年度4号（1935年8月第2号）～23号（1936年5月第1号）、20回

イルムガルト・フォン・マルツァーン(女)	『未来に貢献できる』 戦時の郷土小説	女	第一次 世界大戦	第4年度23号(1936年5月第1号)～第5年度3号(同年7月第3号) ⁽¹⁵⁾ 、7回
O. フィーリツ(女)	『待つ女』(書き下ろし)	女	現代(第 一次世界 大戦後)	第5年度4号(1936年8月第1号)～14号(同年12月第2号)、11回
ゲーアハルト・リンゲリング(男)	『美しきゲジーネ』	女	ナポレオン戦争	第5年度15号(1937年1月第1号)～27号(同年6月第2号)、13回
グスタフ・シュレーアー(男)	『ブロック農場とその女たち』	女・男	現代(?)	第5年度15号(1937年1月第1号)～第6年度17号(1938年2月第2号)、30回
ヘルムート・クヴァースト=ペレグリオン(男)	『アフリカの若い女性』	女	第一次 世界大戦 以前	第6年度17号(1938年2月第2号)～第7年度3号(同年8月第1号)、13回
ヴォルフガング・シュレッケンバッハ(男)	『オスターハーゲンの魔女』	女	30年戦争 直後	第7年度3号(1938年8月第1号)～7号(同年10月第1号)、5回
ヴィリー・ハルムス(男)	『代官フォン・ウツベンモア』30年戦争期の小説	男	30年戦争 末期	第7年度8号(1938年10月第2号)～第8年度1号(1939年7月第1号)、20回
マリア・グレング(女、オーストリア)	『母神像』	女	第一次 世界大戦 後	第7年度26号(1939年6月第2号)～第8年度22号(1940年5月第2号)、22回
ローラント・ベツチュ(男)	『大河のバラード』	女・男	ナポレオン戦争/ 第一次世界大戦後	第8年度23号(1940年6月第1号)～第10年度16号(1942年3月)、41回
アンナ・エリーザベト・ヴァイラオホ(女)	『嵐の中の若木』	女	現代 (第二次 世界大戦)	第11年度1号(1942年7月)～第12年度9号(1944年5月)、27回

(2) 掲載の特徴

①時代背景

まず、時代背景を見てみよう。第一次世界大戦の直前、戦中、直後を含むと15編中半数以上に上る。そもそも前線兵士による大戦の体験・記憶を綴った戦争文学ブームは1929年頃から始まり1936年頃にピークを迎えた。たとえばP. C. エティヒホーファーの『ヴェルダンの決戦』(1936)は戦場の写真が多数掲載されたジャーナリスティックな小説であり、W. ボイメルベルクの『ドイツを包囲する砲火』(1929)は前線世代の精神を呼び覚まして、経済危機にあるドイツに再び自信を吹き込んだ。H. ツェーバーラインの『ドイツを信じて ヴェルダンから革命までの戦争体験』(1931年)は新しいショーヴィニズムに一役買った。ナチス期にそれぞれ40万部、37万部、75万部を売るベストセラー作品となった。⁽¹⁶⁾ その一方、

禁書となるL. レンの『戦争』（1928年）やレマルクの『西部戦線異状なし』（1929年）も大成功を収めた。後者は長いことドイツ文学史の本格的ベストセラーであり続けている。

こうした戦争文学の流行の中で、第一次世界大戦を女性たちはどのように体験したのかをテーマとする小説が誕生するのは至極当然のことと言える。そのうえ、「現代」は適当な時代背景ではなかった。とりわけテーマとしての現代政治は好ましくなかった。独裁体制において、政治のあり方を議論する必要などなかったからだ。一覧表の時代背景に「現代」とあるものの中で、『闇から抜け出して』には共産主義と対立する国民社会主義運動が背景に描き込まれており、『大河のパラード』では第一部はナポレオン戦争の時代だが、第二部には1923年のフランス軍のルール地方占領と「消極的抵抗」がテーマになっており、最後の『嵐の中の若木』には1940年5月10日のドイツ軍のオランダ侵攻が描かれていて、時期を限定することができる。しかし、その他の作品では、自動車に乗って買い物に行く（『鏡の中の顔』）、大戦から帰還して（『新しい家』）といった言及から「現代」を想像するしかなく、『ブロック農場とその女たち』も時代背景は一向に分からない。特に言及がないから「現代」なのかもしれない。つまり、社会的政治的出来事から離れて筋が展開する「時無し」の物語といえる。

時代背景はこのほか、30年戦争期とナポレオン戦争期があるが、どちらもドイツの困窮の時代と新しい国家への意思を描くに当たり、パラレルな関係が明白な過去へ時代を移動させている。

②主人公たち

次に主人公を見てみよう。作者が女性か男性かに関わりなく、ほとんどの連載で主人公を女性に設定しているのは、『ナチ女性展望』が女性雑誌であることを考えれば自然なことである。その主人公は大きく2つのタイプに分けられる。

第1のタイプは、最初から模範的な女性として登場する場合である。このタイプはさらに2つのタイプに分けられる。すなわち一方は、女性としての使命を果たしつつ、男性に代わって男性に負けぬ判断力と行動力で幾多の困難に打ち勝っていくタイプである。『女主人』のフレーダや『美しきゲジーネ』の主人公がそれである。時代背景は異なるが、2人とも戦争で不在の夫に代わり、農場を守り危機の時代を乗り切っていく。

『女主人』は熱狂的な雰囲気の前夜から始まり、フレーダの夫は将校として出征する。主人公は、祖国のために闘う意義を感じて夫を戦場に送り出しており、農場を守ることを「彼女の戦い」と位置づけている。戦況は夫の手紙や休暇で帰郷した夫の話から知れる。フレーダが、夫に差し入れを届けたり、重病の子どもを名医に診せるためにベルリンへ出かける以外、この小説は農場という銃後から第一次世界大戦の時代を描き出している。使用人の召集と馬の供出で農場運営の困難が始まる。難病に罹る一番下の息子、村に蔓延するインフルエンザ、家畜飼料の制限、食糧制限、人手不足を補うためにロシア人捕虜を使う難しさ、夫不在の農場家族がロシア人捕虜と親しくなり、娘が妊娠した事件、サボタージュするフランス人捕虜、夫を出征させ出征家族手当を国から受け取り働かない農婦たち、代用食料、駅で通過部隊に暖かい飲み物を提供する赤十字女性補助員、都市では女性車掌が出現する。青白い顔の子どもたち、農村に物乞いに来る飢えた母子や戦争孤児、都市の飢餓状態など、当時の日常生活で何が起こったのか克明に知ることができる。フレーダは和平は裏切り行為と考えるが、キールで革命が起こり、皇帝はオランダへ亡命。父は戦死するが、夫の帰還に安堵し、自分たちが生きていることの幸せをかみしめる。

『美しきゲジーネ』は、ナポレオン占領期から始まる。ゲジーネは両親の勤める相手との結婚を断り、農場主ヒンリッヒの妻となる。そこで彼女の能力をいかんなく発揮するが、夫は2人の時間が取れず欲求不満になる。折しも解放戦争が始まり、既婚で3人の子持ちの夫に召集令状は来なかったが、夫は冒険を求めて軍隊に志願する。ライプチヒの戦いが終わり、戦闘不能の身体となって夫が戻ってくる。夫はアル中となり、遊び歩いては多額の借金を作ってゲジーネを苦しめる。厳冬の雪の中で死んでいる夫が発見されるが、自殺の可能性が高かった。そして、その死にはゲジーネ自身間接的ながら加担していた。その後、彼女は両親がもともと勤めていた男性ヴィルヘルムと結婚することになる。結婚にあたって秘密を持つことを嫌ったゲジーネは、夫の死についてヴィルヘルムに語る。すると彼も事故死する。ゲジーネは自殺を疑うが、以後は一人で農場を守り、2人の息子を育てる決心をする。

ゲジーネは暗い面を引きずっているが、夫の親族たちには理解され支持されており、これも彼女が農場と子どもたちを守るために厳しい決断を下さなければならぬ試練として描かれている。

夫を殺害された後、農場を守る『母神像』のクリスティアーネや、夫の

出征中にワイン農園を細々と守り、味方の勝利にも貢献する『大河のバラード』第1部のユリアーネもこのタイプに入れられないこともない。しかし前者はあまりに母性に限定され、後者は主要な人物の群像の一人ではない。

さて、第1のタイプの他方は、男性に尽くし待つ女性たちのタイプで、郷土に根ざし受動的ながらひたむきに生きる女性たちである。『待つ女』のトルーデと『未来に貢献できる』のヒルデガルトがそれである。

トルーデは幼なじみのフランツと仲が良く、やがて身分違いながら紆余曲折の末、結婚する。しかし、フランツに流れる芸術家の血は故郷には留まらず、度重なる放浪の末、自動車事故で死ぬ。芸術家としての夫を支え続けたトルーデは2人の息子、バイオリニストとなった長男と農家を継ぐ次男によって報われる。

一方、ヒルデガルトは農村の出身ではないが、ヴァイマルの野戦病院に通院していた将校ハインリヒと知り合い、戦場に戻った彼の帰りを待つ。待つ場所は、都会ではなく、夫たちの不在のなか姉たちが守る農場が選ばれている。トルーデもヒルデガルトも、女性に求められた役割を果たしながら「待つ女性」なのである。

第2のタイプは、経験不足から物事を誤解し誤った行動を取る主人公がやがて、過ちを経て一人前に成長し、幸せな結婚生活を送れるようになる女性たちである。『鏡の中の顔』のヨジーネ、『闇から抜け出して』のトリーニ、『人間の転機』のフリードリーケ、『嵐の中の若木』のクリスタがこのタイプに入る。

彼女たちが、第1のタイプの女性たちと決定的に異なるのは、農場主の妻あるいは農村女性、また農村に生きることを選ぶ主人公ではなく、都会の女性であり、『ナチ女性展望』の読者と同じ中産階級の女性たちだという点である。これらの小説は、男性からの誘惑、恋愛問題、夫婦生活の危機や享樂的生活の畏など、娯楽小説的要素が強いのも特徴である。

『女主人』と同じく第1次世界大戦を時代背景にしても、『人間の転機』のフリードリーケはどのように生きて行くべきか分からず、時流に合わせて、納得のいかない戦時結婚を選ぶ。夫は富裕で美男子で教養もあったが、彼女は嫌悪を感じ、親戚づきあいも上手くできない。見知らぬ男性の子どもを産むという思い、子どもの事故死、夫の反対も聞かずに行う社会主義者への手伝い。戦時結婚をした主人公の苦悩が描かれてゆくが、転機は負傷した夫の帰還である。障害者として生きるより死を望む夫と社会主義的思想を持つ妻との溝は埋めがたい。失った子どもへの後悔、

食糧難。それでも2人は徐々にお互いを理解し始める。終戦という一つの終わりと、2人に2人目の子どもができ、ようやく夫婦関係の始まりが予告される。

最後の連載小説『嵐の中の若木』は1940年5月10日のドイツ軍によるオランダ侵攻に至る時事的背景を持つ。クリスタは少し年上のオランダ人男性と結婚する。家族から離れた孤独感、夫の家族との緊張関係や異文化の問題、何不自由ない生活ではあるが、仕事に忙しい夫。地に足が着かない精神状況の彼女ではあったが、戦争の危機が迫る中で夫の存在の大切さを認識し、また若い妻に余計な心配を掛けないようにしていた夫の愛を確認するようになる。

『人間の転機』の主人公が時代制約的な結婚により苦悩し成長する展開を持つ一方で、『嵐の中の若木』の主人公の未熟さと成長は、外国人との結婚という条件の中で描かれている。

③農場と工場、郷土と都会

『美しきゲジネ』と『ブロック農場とその女たち』は第5年度15号（1937年1月第1号）から同時に始まり、前者が先に終了するが、『ナチ女性展望』の読者はこの時期2つの連載小説を同時に読める贅沢を味わえた。この2つの小説には似通った点がある。ゲジネの夫は農場の仕事から逃げ最後にはアル中となり借金で農場を破滅させそうになるが、3代前の農場主も同じだったことが語られる。頼りない農場主に代わり妻が農場を維持するのである。同じようにブロック家でも、数世代にわたり農場主の賭博癖で農場を失う危機に陥るが、それを救ったのはその妻たちであった。ブロック農場では、こうした「血」が信じられていた。しかし主人公のエアハルトは意志の力でこの血の宿命を乗り越え、立派な農場主となる。

ブロック農場の物語には、「農場と工場」、「郷土と都会」の対立構造が見て取れる。エアハルトは農場を支配する母に対して、立派な経営者であることを証明するために製材工場を建てる。しかし、農場が洪水に飲み込まれようとするとき、工場を捨てる覚悟で防護壁を破壊して工場へ濁流を導き、歴史ある農場を救う。こうして彼は晴れてブロック農場主となる。

『ブロック農場とその女たち』は主人公が男性である稀なケースだが、彼を巡る2人の女性、クリストリーベとマグダレーネにも「自然と都会」の対立が書き込まれている。命名から見ても前者は「神の愛」であり、後者は「罪深い女」の陰が付きまとっている。クリストリーベは農場で働くようになって8年、エアハルトの子どもを密かに出産する。エアハルトが

彼女との結婚を母に願うも、他の農場主の娘、マグダレーネとの結婚が決まっている。クリストリーベは湿地を手に入れ、自分に与えられた分をわきまえて自給自足で息子を育てていく。一方、エアハルトの妻となったマグダレーナは、都会の高級ペンションで就労経験のある都会派女性である。彼女には子が恵まれず、クリストリーベに対する嫉妬からさまざまな策謀を考え出す。当然、夫婦関係もうまくいかない。最終的にこの嫉妬の妻は洪水に飲み込まれて死に、「郷土」の勝利に終わる。

国民社会主義は決して工業化を軽視したわけではなかったが、自給自足を目指して、農業は国家基盤と喧伝された。さらに工業と農業の関係はジェンダー理解とも結びつけられた。すなわち近代化と連動する工業は男性性として、収穫と豊穡が結びつく農業は女性性と捉えられた。女性雑誌『ナチ女性展望』に掲載された小説の主人公の多くが最初からしっかり者の農場の女主人や農村女性であることには、こうした国策や当時のジェンダー理解が反映されていると考えていいだろう。それゆえ、作品に農場と工場、郷土と都会の対立構造がある場合は、前者の優位が明確にされている。

『新しい家』は、都会から離れて郊外に家を建てる若い夫婦クリスチアンとブリギッテを描いている。彼らの手本となるのは隣に先に家を建てた農家出身の若夫婦であり、彼らから菜園の作り方を始め多くを学んでゆく。自然に親しむようになったブリギッテは結婚7年目にようやく妊娠する。子どもを授かるのは都会ではなく、自然に溢れ農業生活を営む所であることが示唆される。『新しい家』の連載3回目の第3年度19号は、「入植者特集号」でもあった。スケールがずっと大きくなるが、アフリカに農園を建設するドイツ人の苦労と成功を描く『アフリカの若い女性』も「入植者物語」といえよう。

小説の舞台として都会はまず出てこない。題名に「農村小説」あるいは「郷土小説」と明記されている場合もあるが、『鏡の中の顔』ではハヴェル川沿い、『闇から抜け出して』はハルツ地方、『人間の転機』はエルベ川沿いのシュヴェルム、『待つ女』はエルツ山岳地方、『大河のパラード』はラインラント地方と、郷土色豊かである。「郷土文学」は当時、「戦争体験文学」と並んで好んで読まれたジャンルでもあった。⁽¹⁷⁾

④プロパガンダ的作品

『未来に貢献できる』の著者フォン・マルツァーンは第4年度18号(1936年2月)～第5年度14号(1936年12月)の間に7回にわたって

記事「戦時のドイツ人女性（体験文学）」の中で、第一次世界大戦期における女性の戦時動員を記したさまざまな本を紹介している。彼女はそこで『女主人』も取り上げている。農村労働や農村における憂慮を粉飾することなく緊張感を持って描いている点を評価する一方で、不用意な登場人物の設定を批判している。一貫して戦争に懐疑的な義父、愛国主義的でない弟、夫の出征手当を受け取り仕事をさぼる農村の女たちを例として挙げ、彼らはドイツ民族を正しく示していないと主張する。しかし、『女主人』の魅力は、愛国主義的なフレダや戦場で戦う彼女の夫や父など支柱になる人物がいる一方で、戦争に対する多様な考え、戦争によってもたらされる苦悩や悲劇、エゴイズムなど、ありとあらゆる戦争と人間の関係が描き込まれていることから生まれるリアリティにある。実際、その後の第二次世界大戦の銃後では、ここに描かれていることと同じことが繰り返されたのではなかったか。

むしろ『未来に貢献できる』の中で、青年ハインリヒがヒルデガルトに向かって、戦場で戦うのは男性の仕事であり「産みの戦い」は女性の仕事であると、彼にはそぐわないナチ・イデオロギーを代弁するくだりは、作者が「ドイツ民族の正しいあり方」を伝えたかったのだろうが、なんとも興ざめな場面である。このように小説の本筋から逸れて、イデオロギーを直接読者に説教する作品をプロパガンダ的作品とするならば、その最たるものはマリア・グレングの『母神像』である。

オーストリア人女性作家グレングは、作品の舞台をハンガリーとの国境地帯にある農場に設定している。東方から襲ってくる残虐なユダヤ人やトルコ人、代々受け継いできたドイツ人の土地を奪おうとするハンガリー人、それに加えて、犯罪と迷信に生きるジブシーたちがドイツ民族の敵として描かれる。ここにはグレングの民族主義的排他性が見て取れる。

ジブシーに夫を殺害されたクリスティアーネは、3人の子どもを育てながら農場を守らなければならない。しかし、彼女は農場運営に男並みの力を発揮する『女主人』や『美しきゲジネ』とは違い、「母神像」を体現する人物として登場する。自分の子どもたちを愛情込めて育てるだけでなく、彼女は、両親に虐待されているジブシーの子どもを引き取り、ジブシーの子どもを宿したローザの嬰兒殺しを思いとどまらせる。まさに子どもを守る母神なのである。そこにあからさまなナチスの女性イデオロギーが盛り込まれる。彼女に思いを寄せる年下の教師ヴォルフラムは「未来の最も輝ける民族は、真に高貴で女性的愛の力を持つ母たちから生まれる民族である」⁽¹⁸⁾と母たちの中の母としてのクリスティアーネを賛美する。一

方、彼女自身、壁に掛かっている先祖の肖像画を見て脈々とつながる純血の子を産む女性たちのことを考える。極めつきはクリスティアーネの農場に出入りする老医師が、ヴォルフラムに対する愛情を意識し始めたクリスティアーネに再婚し子どもを産むことを促す長口上である。

本当にやくざな者だけが子どもを増やせばいいのかね。ジブシー女だけが沢山の子どもたちを自慢していれば本当にいいのかね。(…) 価値の低いものやよその純血種を後背地で守り、最良のものを破滅と死へ追いやった戦争が終わり、私たちには再び高貴なる人間が必要だ。クリスティアーネ、あなたのような女性こそ、魂の抜けた世界に再び未来の高貴で偉大な人物、英雄や心根のしっかりした美しい女の子を贈らなければならぬ。そのような女性こそが、価値ある、本当に新時代の人間を育てなければならぬのだ。(…) そういう女性こそ私たちドイツ人みなものなのだ。⁽¹⁹⁾

イデオロギーを伝えようとする思いが先走ったこうした不自然な対話によって、この小説は結局、露骨なプロパガンダ作品となってしまっている。

イデオロギーを直接伝達する『母神像』とは異なるタイプのプロパガンダ的作品が『代官フォン・ウッペンモーア』である。

この小説は、30年戦争末期に戦争の意味に疑問を持った代官ディートマル・フォン・ウッペンモーアが、12年間放置されていた、湖と湿原を自然の要塞とする農地ウッペンモーアに、戦争で虐げられたリッターズハーゲンの人々を移住させ、飢えることなく平和な共同体を作ること成功する物語である。そこでは、個人ではなく共同体の利益のために労働を第1の掟として、子どもの世代のために働くことが謳われる。代官自身が先頭に立って掟に従う。そこでは、男女別に仕事が進められ、女性たちは母になることが求められ、未婚は罪と見なされる。

この小説は、絶望しかけている人々に自分たちの力を信ずる信念を与える強力な指導者を描いている。最後に外国人を排除する時には、もはやウッペンモーアという土地のためではなく、より良いドイツのためであることが高らかに宣言される。30年戦争期に時代背景は移されているが、ディートマル=ヒトラーであり、人々が作り上げる生活共同体は民族共同体だと連想するのは容易い。その生活共同体に通用する価値観もまたナチスの価値観と同じだからである。

プロパガンダ作品と言ってもいい『母神像』や『代官ウッペンモーア』

以外に、『未来に貢献できる』や『大河のバラード』にもイデオロギー的側面が見られるが、『ナチ女性展望』が官製雑誌だったことを考えれば、プロパガンダ色の濃厚な作品数は思いの外少ない。読者をイデオロギーでがんじがらめにするのが得策だとは、全国女性指導部は考えていなかったと推測できる。

⑤書き下ろしか、既出版か

掲載された連載小説15本のうち、作者について全く情報を得ることができなかったのは『人間の転機』のクルルバオム=ジーベルト、『アフリカの若い女性』のクヴァースト=ペレグリーン、それに『代官ウッペンモーア』のヴィリー・ハルムスだった。『闇から抜け出して』と『嵐の中の若木』については、著者について若干の情報は得られものの、書き下ろしか既出版なのか不明である。

残りの10作品中、書き下ろしは4作品で、そのうち『未来に貢献できる』はその年の秋に単行本になることが予告されており、『ブロック農場とその女たち』は戦後の1954年に刊行されている。『鏡の中の顔』とフィーリツの処女作『待つ女』は、その後出版されたか確認できない。つまり、既出版の小説の方がずっと多かったということである。『美しきゲジネ』の出版年は1936年、『オスターハーゲンの魔女』が1937年、『母神像』が1938年、『大河のバラード』が1939年だから、出版された翌年には連載を開始していることになる。『女主人』は1933年に出版されていることから、連載開始の方が早かった可能性がある。いずれにせよ少し待てば、新刊の小説を気軽に読めたわけで、これは『ナチ女性展望』を講読する上での魅力になったと考えられる。連載小説が当時の女性雑誌の必須の構成要素だったことを考えれば、編集部もそれを意識していたと思われる。

(3) 作家たちについて

戦後、連合国は迅速に排除すべき文学リストを作成し、ナチ時代のほぼ全ての名だたる作家を執筆禁止にした。しかし、時間を要した「非ナチ化」のプロセスの中で、後にはドイツ主導となる中で、この禁止は罰金刑で一般的に解消されていった。こうして遅くとも1950年から過去の罪を背負っている数多くの作家たちの新刊やこれまでの作品の改訂版が出版されることになる。⁽²⁰⁾ シュレーアーの『ブロック農場とその女たち』が1954年に刊行されるのは、この事実符合する。中堅作家たちがナチズムへの同調から忘れ去られたのに対して、大物作家や売れっ子作家がすぐに復活

できたのは、すでにナチ時代に多くの読者を獲得していた彼らの本が良く売れたからである。

『ナチ女性展望』の作家たちの中では、マリー・ディールス（1867年6月10日～1949年11月5日）とグスタフ・シュレーアー（1876年1月14日～1949年10月17日）が1933年10月26日のフォス新聞に掲載されたヒトラーに対する「比類なき忠誠と服従の誓い」⁽²¹⁾に名を連ねる88人の作家に含まれている。ディールスは1918年に伝統的保守派政党である人民党へ、1922年に国家人民党へ、そして1930年にはナチ党へ入党している。彼女は出身地のメクレンブルクを舞台にした約40の郷土文学を出版し、当時最も読まれた女性作家の一人だった。戦後はソ連占領地区で4作品が「排除すべき文学リスト」に載り、1953年のDDR（東ドイツ）時代にもさらに1作品が追加された。⁽²²⁾

一方シュレーアーは、70冊の本をベルテルスマン社から刊行し、どの作品も販売部数は高く、経済的にも成功した。⁽²³⁾なかでも、すでに1929年に出版された『故郷対故郷』はナチ政権期の1933年～1945年に60万部を記録するベストセラーとなった。この小説は18世紀のピーダーマイアー的雰囲気を持つが、そこに突然「血と土」のイデオロギーが現れる。遍歴の時計職人がチューリンゲン地方が気に入り、その地の後継者のいない時計屋の老親方に迎えられる。しかし、フリース人の彼の母は、息子を海岸地方へ連れ戻そうとする。母は、愛する故郷チューリンゲンから離れ、遠い北の地方で若くして死亡した夫の死に責任があった。主人公は次第に母の考え方と対立し、父の血の声に従って、彼の新しい故郷に導かれる。脈々と続く「血と土」の運命は、『ブロック農場とその女たち』にも明瞭に読み取れる。

シュレーアーの作品は現代の入植地から没落農民世代の農村に根ざす主人公たちを描き、19世紀を時代背景とすることが多かった。単純な生活を称賛し、文明、技術、工業化、貨幣経済、都市化に対する懐疑が表明され、血の力への信仰は、彼の農民小説をナチズムの「血と土」のイデオロギーと緊密に結びつけることになった。シュレーアーの作風は、市民リアリズムに分類されるが、そこに彼の政治的姿勢が影響を与えている。初期の農民運動の右翼的立場から、30年代はナチズムに接近し、第二次世界大戦初期の軍事的成功の時期にヒトラーの賛美者となり、賛美の詩を捧げている。

戦後のソ連占領地区の「排除すべき文学リスト」にシュレーアーの小説は2作品挙げられた。その一方で、すべての作品がソ連占領地区およびDDR初期のリストに載ったのが、ヴォルフガング・シュレッケンバッハ（1904年3月12日～1986年3月1日）だった。このため、戦後彼は執筆を諦めて

いる。『ナチ女性展望』の『オスターハーゲンの魔女』（1938年）に関しては、迷信に取り憑かれて理性を失う愚かな民衆の犠牲になる女主人公を描いており、この作品には特段、ナチ・イデオロギー的描写は見られない。

シュレッケンバッハは、1933年のナチスの権力掌握後は、新しい権力者の意図に合わせた戯曲や子ども向けの芝居を著した。⁽²⁴⁾そして、ナチ党の出版社であるエーアー出版社から刊行され、10万部を超えるベストセラーとなったのが『シュテディンゲンの人々』（1937年）だった。表面上は13世紀を舞台とした歴史小説で、プレーメン大司教とオルデンブルク伯爵に対するシュテディンゲンの農民の戦いと破滅を描いている。

丁度シュテディンゲンの戦いから700年に当たる1934年にアウグスト・ヒンリヒスが戯曲『シュテディンゲンの人々』を完成させ、戦闘のあった地から遠くないオルデンブルク郡ポークホルツベルクに造った野外劇場で1935年から37年まで上演され15万人の観客を動員している。ナチ党はこの地を「北のオーバーアマガウ」と呼び、シュテディンゲンの農民をゲルマンの農民と讃えて祭儀の場とした。

シュレッケンバッハの作品は、同じ題材のそれまでの農民小説と比較して、民族共同体の軍事化と犠牲死賛美という点が突出していた。シュテディンゲンの農民の犠牲がドイツ民族の神話となるよう、すべてが民族共同体に従属しなければならず、最高の目標は犠牲死であり、血について語るとき、それは家族ではなく常に民族と関わる。シュテディンゲンの人々は大司教に屈服したくないから、生きることより死ぬ自由を選ぶのだと言うとき、シュレッケンバッハの描く自由とは、全体の名誉のための個人の犠牲を意味しており、この価値観は、ナチスのイデオロギーとぴったり重なっていた。

『ナチ女性展望』に連載された小説の中で、戦後DDRの「排除すべき文学リスト」に載ったのは、マリア・グレング（1888年2月26日～1963年10月8日）⁽²⁵⁾の『母神像』だった。グレングは1937年に女性では初めてオーストリア文学国家大賞を受賞している。30年代の彼女の小説にはすでにナチズムの思想が明瞭に表れていたが、1938年には『母神像』が出版され、同年オーストリアがドイツに併合されると彼女はナチ党に入党し、以後ヒトラーへの忠誠を示すために生年をヒトラーの生年に合わせて1889年に変更している。さらに、同年ナチスによってフーゴ・フォン・ホフマンスタール（ホフマンスタール自身は1929年に死去）の家族が追い出されると、その「ホフマンスタール館」にグレングが入居し、終生そこに住み続けている。

彼女の作品に好んで取り上げられたのは、自然神秘主義思想、大都市への嫌悪、農村ロマン、母性崇拜、ドイツ性や人種優生学といった民族主義的に保守的で田園文学的テーマだった。ナチ・イデオロギーの代弁者だった彼女は、しかし戦後その過去を問われることなく、青少年向け文学の執筆や挿絵画家として活躍した。それどころか、亡くなる直前の1963年には、ニーダーオーストリア州文学部門文化賞を授与されている。

以上のような、ナチ時代に社会的名声や経済的成功を取めたナチスの作家たちと較べると、『嵐の中の若木』のアンナ・エリーザベト・ヴァイラオホ（1887年8月7日～1970年12月21日）は変わり種といえる。⁽²⁶⁾

ヴァイラオホは1906年、マックス・ラインハルトの演出によるドイツ劇場のシェイクスピア作「冬物語」の舞台で女優デビューを果たし、第一次世界大戦終戦までラインハルトの舞台に出演した。執筆活動に専念するのは1918年からで、三部作『さそり』（1919年、1921年、1931年）で作家として名をなした。この小説は、レスビアンをテーマとしたドイツ語圏では最初の文学作品の一つに数えられている。同時代のほかの作品では、ホモセクシャルは犯罪、病気、罪と結びつけられて語られるのが普通だったが、ヴァイラオホはレスビアンやホモセクシャルの人々に対するさまざまな差別を描くことで、偏見や型どおりの考え方に批判を加えた。アメリカでは1932年から1975年までにいくつもの翻訳版が出たが、ドイツでは当然のことながらナチスの禁書リストに挙がり、この三部作の新版刊行は90年代まで待たなければならなかった。

執筆活動を続けるためにはゲッベルスの支配下にある全国著述院に加入する必要があった。代表作が禁書リストに上がっていたにもかかわらず、ヴァイラオホは許可を得る。ナチ党に入党はしていない。さまざまな新聞や雑誌の連載を含めて生涯に60あまりの小説を出版したが、ナチス期にも21の小説を刊行している。そのほとんどが女性の運命を描く作品で、1943年には『謎のマヌエラ』が「恋愛万歳」として映画化もされた。しかし、21のどの作品もナチ・イデオロギーから距離を置いた内容であると理解されている。

おわりに

ナチスの権力掌握後、ノーベル文学賞作家トーマス・マンを始めドイツ文学を牽引していた作家たちは亡命し、あるいはエーリヒ・ケストナーのように出版禁止命令を受けて国内亡命を余儀なくされた。こうして、これまで目立たなかった民族主義的で保守的な作家たちが脚光を浴び、ナチス

期のベストセラー作家となっていった。グリム、ピンディング、シュレーアーたち大物作家のほかに、ナチズムに心酔し文学という手段で貢献しようとしたアーナカーやシーラハラ若手の「党を支持する詩人」グループもあった。『ナチ女性展望』にも、シュレーアーの連載小説のほか、こうしたナチ時代を代表する作家たちの詩が多く掲載されている。

国民啓蒙・宣伝大臣ゲッベルスは、メディアによる国民啓蒙と思想統制の重要性を充分理解していたが、焚書で始まるナチスの著述・出版統制政策は、官僚組織の問題も手伝って1938年末から第二次世界大戦開戦を迎えるまで徹底されていなかった。特に女性雑誌は非政治的刊行物と見なされ、開戦までは特段の検閲も受けなかった。

『ナチ女性展望』初の連載小説にナチスの信奉者である女性作家ディールスを選ばれたのは自然なことだったろうが、その内容にはイデオロギー色は感じられない。1937年頃から知名度のある男性作家、シュレーアーやシュレッケンバッハの作品が掲載されているが、『ブロック農場とその女たち』にはシュレーアー独特の「血と土」のイデオロギーが感じられるものの、プロパガンダ性は特にならない。イデオロギー色が濃厚に表れるのは、その次に続く『代官ウッペンモーア』と『母神像』である。しかし『ナチ女性展望』が官製雑誌であることを考えれば、プロパガンダ的作品は極めて少ないと言っていいだろう。

好まれたジャンルは、当時の一般的傾向同様、第一次世界大戦の体験を記す戦争文学と郷土文学だった。そうした時代と場所の枠組みの中に登場する女性主人公には2つのタイプが見られた。農場や農村、郷土に生きる主人公は女性の理想像として描かれる傾向があり、都市環境に染まった主人公や都市に住む中産階級の主人公は、誰もが陥りやすい過ちを経て初めて幸せな結婚に至るといって、教養小説的傾向があった。農村女性と都市の女性との描き分けにナチス的傾向が見えないわけではないが、読者にとってはむしろ、自分に近い環境や遠い環境で運命に翻弄される女性の生き方を読む娯楽性が重要だったと考えられる。

『ナチ女性展望』は他の商業女性雑誌と異なり、冒頭にナチ・イデオロギーや時事問題の特集する記事を置き、ナチ女性団とドイツ女性事業団の活動報告を行うことで官製雑誌としての面目を施していた。その一方で、販売価格を抑え、ファッション頁の流行服の型紙を無料で付録とするなど、購読者の拡大に努めた。その意味で、女性雑誌必須の項目である連載小説も、イデオロギー伝達手段として利用するよりも、読者に娯楽を与えるサービスとして機能させたと考えられる。

註

- (1) 本論は、平成24年度～26年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）「第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるジェンダー・民族表象の国際比較」（研究代表者 杉村使乃）の研究の一部である。
- (2) ノルベルト・フライ/ヨハネス・シュミッツ（五十嵐智友訳）『ヒトラー独裁下のジャーナリストたち』朝日出版（朝日選書560）、1996年、108頁。
- (3) 雑誌の号数の付け方について説明しておこう。創刊号が発刊された1932年7月から翌年6月までの一年間を「初年度」と呼んでいる。第12年度と最終年度に発刊の乱れがあるが、原則各年度1号は7月であり、最終号の1944/45年号は「第13年度」となる。
- (4) フライ/シュミッツ、108頁。
- (5) 頁数については、創刊号は28頁で、第2年度5号（1933年9月1日）で32頁に増頁。第8年度6号（1939年9月第2号）から28頁に減少。戦時統制措置として用紙節約のために新聞は12頁、グラビア雑誌は28頁に制限された。翌10月第2号で20頁に減少。第12年度1号（1943年9月第1号）から20頁と16頁の号が交互する。1943年は1月にスターリングラード戦でドイツ軍が降伏し、敗戦への決定的転機となった時期である。第12年度12号（1944年8月）で12頁、廃刊の1944/45年号は4頁になる。
- (6) Sarkowicz, Hans / Mentzer, Alf: *Schriftsteller im Nationalsozialismus. Ein Lexikon*. Berlin, 2011, S.11-13.
- (7) Zit. nach Adam, Christian: *Lesen unter Hitler. Autoren, Bestseller, Leser im Dritten Reich*. Köln, 2010, S.27/28.
- (8) Vgl. Adam, S.27.
- (9) Zit. nach Adam, S.53.
- (10) Sarkowicz/ Mentzer, S.24.
- (11) Adam, S.324/325.
- (12) Adam, S.33/34.
- (13) Adam, S.61.
- (14) 拙論参照。「銃後から前線まで—『ナチ女性展望』に見る戦時活動』『軍事主義とジェンダー』インパクト出版会、2008年、48～73頁。「女性雑誌『ナチ女性展望』に掲載されたファッションと料理のページから再構成する第二次世界大戦下の暮らし』『敬和学園大学研究紀要』第21号、2012年、145～168頁。
- (15) 発行頻度は、記載がない期間もあるが、大抵は表紙に明記されている。「14日に1冊」で創刊され、第8年度18号（1940年3月第2号）から「月2冊」、第10年度16号（1942年3月）から「3週間に1冊」、第11年度15号（1943年5月）から「月1冊」となる。「14日に1冊」の時期は、各月2号あるいは暦の都合で3号発刊の月がある。「第5年度3号（1936年7月第3号）」という表記があるのは、そのためである。
- (16) Vgl. Adam, S.136/137 u. S.323-325.
- (17) ナチ時代に大出版社となったベルテルスマン社の売り上げは、1935年の1.2百万ライヒスマルクから1941年には8百万ライヒス・マルクを上回った。そのうち90%は、郷土文学、戦争体験本および国防軍向け出版物だった。Vgl. Sarkowicz/

Mentzer, S.58.

- (18) *NS Frauen Warte*, 8 .Jg. H 5 , Septemberheft 1939, S.154.
- (19) *NS Frauen Warte*, 8 .Jg. H20. 2 . Aprilheft 1940, S.406.
- (20) ハンス・ヨーストだけは1955年まで出版を待たなければならなかった。Vgl. Sarkowicz/ Mentzer, S.67/68.
- (21) ジャーナリズム全体の強制的同質化に道を拓く1933年10月4日の「編集者法」公布や10月14日の国際連盟脱退を受けてヒトラーへの支持を表明したもので、フォース新聞だけでなく、同時にフランクフルト新聞など他紙でも公開された。
- (22) Marie Diers. http://de.wikipedia.org/wiki/Marie_Diers . (2014年11月23日閲覧)
- (23) シュレーアーについては以下参照。Simonas, Olaf: Gustav Schröer, 1876-1949. Biographie, Nachlaß, Literatur. 2004 (<http://www.polunbi.de/pers/schroeer-01.html>); Gerstmann, Günter: Schröer, Gustav Wilhelm. (<http://kulturportal-west-ost.eu/biographies/schroer-gustav-wilhelm-2/>); Gustav Schröer. (http://de.wikipedia.org/wiki/Gustav_Schr%C3%B6er). (以上2014年11月23日閲覧) Adam, S.277-279.
- (24) シュレッケンバッハについては以下参照。Westenfelder, Frank: IV.4.1. Genuin nationalsozialistische historische Romane. In: *Genese, Problematik und Wirkung nationalsozialistischer Literatur am Beispiel des historischen Romans zwischen 1890 und 1945*. Frankfurt, 1989. (<http://www.westfr.de/ns-literatur/blunck.htm>) (2014年11月23日閲覧)
- (25) グレングについては以下参照。Maria Grengg (Österreichische Nationalbibliothek) (http://www.onb.ac.at/sammlungen/litarchiv/bestaende_det.php?id=grengg); Maria Grengg (Personen Lexikon) (<http://geschichte.landmuseum.net/personen/personendetail.asp?id=648198133>); Maria Grengg (http://de.wikipedia.org/wiki/Maria_Grengg) (以上2014年11月23日閲覧)
- (26) ヴァイラオホについては以下参照。Schoppmann, Claudia: Anna Elisabet Weirauch (1887-1970). Berlin, 2005. (http://www.lesbengeschichte.de/bio_weirauch_d.html). (2014年11月23日閲覧)